

日米両国の就学前施設等における子育て支援に関する研究 —図書館における親子イベントの実態調査—

駒 久美子^{1)*} 近藤 真子²⁾ 疇地 希美³⁾

¹⁾千葉大学・教育学部 ²⁾文教大学・教育学部 ³⁾同朋大学・社会福祉学部

Exploring Music-creating Activities in Child-care Support Settings in Japan and the U.S.:

Musical Events for Young Children and Families in Libraries

KOMA Kumiko¹⁾, KONDO Shinko²⁾, AZECHI Nozomi³⁾

¹⁾ Faculty of Education, Chiba University, Japan

²⁾ Faculty of Education, Bunkyo University, Japan

³⁾ Faculty of Social Welfare, Doho University, Japan

本研究は、日米の公共図書館において実施されている親子イベントの現状を明らかにし、公共図書館における親子のための音楽遊びの実態を探ることを目的とし、日本の図書館159館、アメリカの図書館128館を対象として、質問紙調査を行い、日本の図書館135館、アメリカの図書館5館から回答を得た。その結果、日米いずれの図書館においても、おはなし会は実施されており、日本の図書館では絵本の読み聞かせの他、手遊び・歌遊びを中心としていたが、アメリカの図書館では、日常的に絵本と関連付けた音楽遊びが取り入れられていた。これらのイベントを実施するのは、日本は図書館員とボランティアスタッフであり、アメリカは図書館員が中心であった。そのため、図書館員が実施可能な絵本と音楽を関連付けた音楽づくりプログラムの開発が必要であることが明らかとなった。

This study was conducted at 159 libraries in Japan and 128 libraries in the U.S. to investigate the current status of parent-child musical activities at public libraries in both countries. Responses were obtained from 135 libraries in Japan and 5 libraries in U.S.. The results of the questionnaire survey showed that parent-child storytelling events are held in both Japanese and American libraries. While Japanese libraries mainly held read-aloud and finger play song sessions, the American libraries held music associated activities with picture books on a daily basis. The results further showed that in Japan, these events are conducted by librarians and volunteer staff, while in the U.S., they are only conducted by librarians. The results indicate that there is a need to develop a music-making programs with picture books that can be implemented by librarians.

キーワード：子育て支援 (Child-care Support), 図書館 (Library),
親子イベント (Events for Young Child and Family), 絵本 (Picture Book),
音楽づくり (Music-creating Activity)

1. はじめに

本研究は、日米の公共図書館において実施されている親子イベントの現状を明らかにし、公共図書館における親子のための音楽遊びの実態を探ることを目的としている。これは、日米両国の就学前施設等における子育て支援において、絵本をもとにした音楽づくりプログラムの開発を最終目的とした研究の一部である。

子育て支援を実施している施設は、幼稚園・保育園、支援センター、児童館、学童クラブ等様々あるが、その中で、本研究では日米両国の公共図書館（以下、図書館）に焦点をあてた。図書館では、2012年「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」の改正により、「乳幼児とその保護者に対するサービス」等、子育て支援を意識した

項目が盛り込まれた。それにより、図書館には、子育て支援コーナーが設置されたり、複合施設内に子育て支援センターと図書館が併設されたりしてきた。図書館は、老若男女問わず、子どもから大人まで集う場であり、本と人を結ぶ情報の場であるとともに、人と人を結ぶコミュニケーションの場でもある。昨今では、図書館を核としたまちづくりも促進されている。例えば、幅広い世代や地域間の交流促進を目指した「金沢海みらい図書館」や、図書館と市民学習を融合させた新しい生涯学習施設としての「学びの杜ののいち カレード」などを挙げることができる。また、図書館で行われるイベントも多様化している。例えば地域の図書館では、「おはなし会」や「わらべうたサロン」、「赤ちゃん絵本サロン」などの子育て支援に関するイベントが開催されている。こうしたイベントで「絵本の読み聞かせ」を取り上げている図書館は多い。一方で、飛騨市図書館では、「ジャズライブ」や「大

連絡先著者：駒久美子 k-koma@chiba-u.jp

人のための読み聞かせ」が行われたり、千葉市図書館では「ナイトライブラリー」なども展開されたりしており、子育て世代だけでなく、大人や中高生を対象としたイベントも開催されている。あるいは、音楽を伴ったイベントなども展開されている図書館もある。海老名市立図書館では「図書館音楽LIVE」と銘打ち、本と音楽が楽しめるLIVEを展開していたり、国立国会図書館国際こども図書館では、「子どものための音楽会」としてクラシックの音楽会とブックトークを行ったりしている。国外に目を向けてみると、アメリカの図書館でも同様に、子ども向けプログラムとして「読み聞かせ」や「人形劇」など様々なイベントが展開されている。また、ニューヨーク公共図書館は、ニューヨーク市民にとって文化の拠点であり、様々な情報・サービスが提供されていて、まさに「地域の情報ハブとしての図書館」（図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会、2005年）として位置付けており、これからの図書館にはこうした役割が求められている。

このように図書館の役割が子育て支援や、生涯教育、社会教育と多様化するなかで、葉袋（2015）は、「図書館の中で行われる業務やサービスに関する研究が多く、図書館と図書館を取り巻く社会の関係に関する研究は少ない」ことに言及している。さらに、国際図書館連盟（IFLA）児童・ヤングアダルト図書館分科会編の「Guideline for Library Service to Babies and Toddlers」では、「子どもの発達のごく初期の段階に、話す・聞く・読むなどの言語能力を習得させ強化することが必要である。このために次のようなサービスをいつでも利用・提供できるようにしておくことが肝要である：図書館として適度な範囲での音楽、体を使って遊べる空間、創作劇用施設、家事や簡単な科学・社会体験の場、子どもたちの親と保育者たちを対象とした資料など。児童図書館では親と保育者のために研修の機会の提供や、「作って遊ぼう」などのワークショップ等の開催が望まれる」といった内容が明示されており、図書館における子育て支援プログラムの開発は喫緊の課題である。筆者らは、こうした図書館の役割が多様化している点に着目し、子育て支援としての機能の充実を目指して、絵本をもとにした音楽遊びプログラムの開発を目指している。

筆者らは、大学で保育者養成あるいは小学校教員養成に携わっている。そこで、保幼小に共通して使用できる図書として絵本に着目した。河合（2001）は、「絵本の中の音と歌」において、絵本のなかに音が描かれていることに言及している。あるいは、竹内・奥（2007）は「絵本の中の音楽」において、河合（2001）を援用し、画、言葉、テーマのそれぞれに音楽的な側面があることを明らかにしている。また、「絵本から聞こえる音楽」（古市、2010）といった研究も行われており、いずれも絵本のなかにみられる音楽に着目しており、絵本と音楽の関わりが深いことがわかる。学校教育のなかで、絵本に描かれた音・音楽をもとにした音楽づくりに関する研究は菅ら（2017）や、岡林ら（2017）に見られるものの、子育て支援や社会教育の場で、絵本をもとにした音楽遊びを行った研究は見られない。そこで本研究では、図書館における親子イベントの実態を探ることによって、絵本を

もとにした音楽遊びプログラムを開発する一助としたい。

2. 研究方法

(1) 対象

日本の公共図書館から、都道府県立図書館54館、筆者らの居住地である、東京都市区町村立図書館55館、愛知県市区町村立図書館50館の計159館を対象とした。東京都市区町村立図書館及び愛知県市区町村立図書館は、各市区町村の中央館に依頼した。アメリカの公共図書館から、アメリカ国内蔵書数上位24館、ミシガン州公共図書館104館の計128館を対象とした。いずれも、イベント企画担当者に回答を求めた。

(2) 方法

日本の公共図書館には、質問紙一式を郵送し、アメリカの公共図書館には、Google Foamにより回答を求めた。実施期間は、2020年8月上旬から8月30日までとした。

(3) 質問項目

図書館所在地、親子イベントの対象者（複数回答）、イベント参加方法（複数回答）、昨年度のイベント開催月平均数、昨年度のイベント参加者親子月平均組数、昨年度実施の親子イベント内容（複数回答）、絵本と音楽によるイベント開催の有無、親子イベントの実施担当者、本年度のイベント実施予定について回答を求めた。

3. 結果

日本の図書館135館、アメリカの図書館5館から回答を得た。回収率は日本の図書館84.9%、アメリカの図書館は、感染症拡大の影響により、未だ全面再開とはなっておらず、3.9%に留まった。回答のあった日本の図書館135館の内訳は、東京都市区町村の図書館46館、愛知県市区町村の図書館41館、都道府県立図書館43館、無回答5館であった。アメリカの図書館は、ミシガン州の図書館4館、ニュージャージー州の図書館1館であった。以下、結果については日本とアメリカでは回答数が異なるため割合にて示す。

(1) 親子イベントを実施する際に対象とする親子について

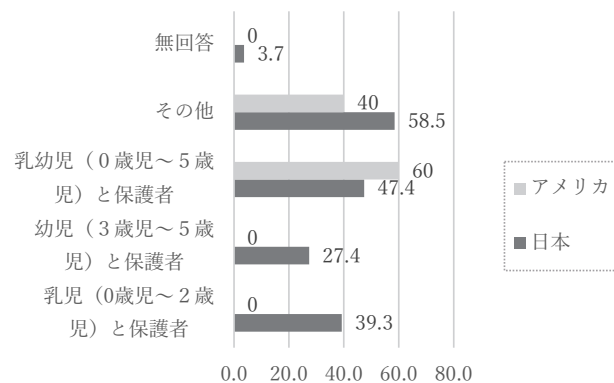


Fig.1 対象とする親子

日本の図書館の5割近く、アメリカの図書館の6割が、0歳児から5歳児の未就学児とその保護者を対象の中心としていることがわかる（Fig. 1）。

「その他」として、日本の図書館では、「小学生の参加も有」や、「イベントによって対象年齢が異なる」、アメリカの図書館では、「乳児用のプレイグループと幼児用のストーリータイムクラスがある」や、「1週間様々な時間帯に、全ての年齢層を対象としたプログラムを用意」といった回答も見られた。

(2) 親子イベントの参加方法について (複数回答)

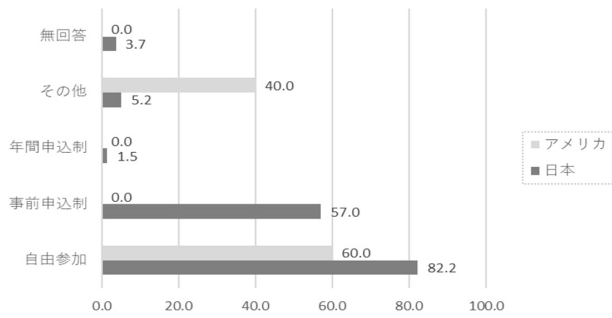


Fig.2 親子イベントの参加方法

日本の図書館もアメリカの図書館も、自由参加を基本としつつ、「自由参加と事前申込の両方による登録を行っている」といった、イベントの内容によって事前申込制を採用している様子が見える (Fig. 2)。また、アメリカの図書館では、昨今の感染症拡大の状況をふまえ、「Facebookからストリーミングするオンラインイベント」のようにオンラインを活用したイベントの提供が行われていた。

(3) 昨年度 (2019年度) 実施された親子イベントの月の平均回数について

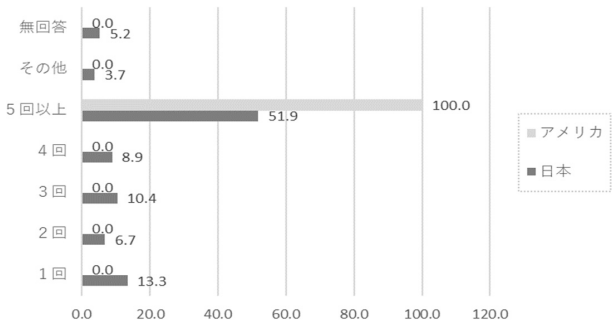


Fig.3 親子イベントの月の平均回数

日本の図書館の5割超は、月平均5回以上実施しており、アメリカの図書館も回答館全て5回以上実施していた (Fig. 3)。これは、(1)の回答にもあるように、1週間のうち、様々な時間帯に、全ての年齢を対象としたプログラムが組まれているため、5回以上は当然の結果といえる。

(4) 親子イベントの1回あたりの参加親子の平均組数について

日本の図書館の参加親子の平均組数は、6~10組が1番多く38.5%、次いで11~15組23.7%となっており、15

組以下が6割超を占めているのに対し、アメリカの図書館は日本の図書館よりも多い組数で実施されていることがわかる (Fig. 4)。

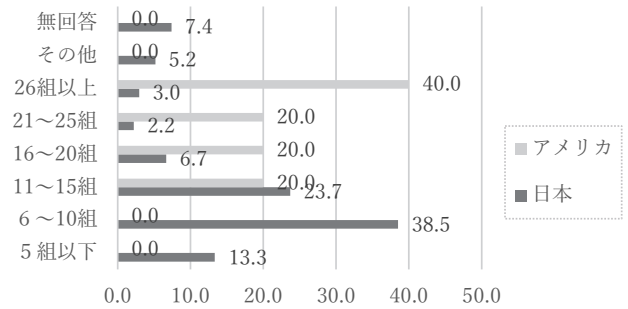


Fig.4 親子イベントの1回あたりの参加親子の平均組数

(5) 昨年度 (2019年度) 実施された親子イベントの内容について (複数回答)

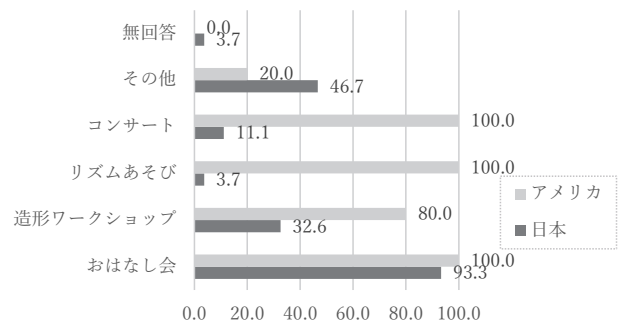


Fig.5 親子イベントの内容

日本の図書館もアメリカの図書館もほとんどの館ではおはなし会が実施されているが、日本はリズム遊びやコンサートはあまり実施されていないのに対し、アメリカでは回答館すべてにおいて実施されており、常時音楽的な遊びも取り入れられていることが特徴的である (Fig. 5)。

(6) (5)において、おはなし会実施と回答した館のおはなし会プログラム内容について (複数回答)

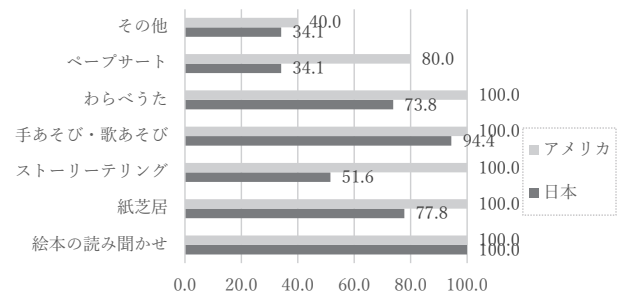


Fig.6 おはなし会プログラムの内容

日本の図書館は、回答した全ての館で絵本の読み聞かせが実施されており、手あそび・歌あそびも94.4%とほとんどの館で取り入れられていることがわかる。それに対し、アメリカの図書館では、絵本の読み聞かせ、紙芝居、ストーリーテリング、手あそび・歌あそび、わらべうたとほぼ実施されており、日本の図書館より、おはな

し会のプログラム内容が多岐に渡っていることがわかる (Fig. 6)。

(7) 絵本と音楽を関連させた親子イベントの開催有無について

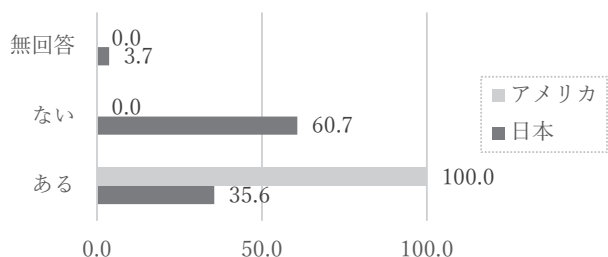


Fig.7 絵本と音楽を関連させた親子イベントの開催有無

日本の図書館では、絵本と音楽を関連させた親子イベントの開催について、「ある」と回答した館は35.6%に対し、アメリカの図書館は全て開催したことがあると回答しており、(5)の親子イベントの内容に関する結果にも見られたように、アメリカの図書館では、親子イベントに音楽的な内容を取り入れていることが特徴的である (Fig. 7)。

「ある」と回答した日本の図書館では、「宮澤賢治のお話会」でお話の朗読とバイオリン演奏といったお話と楽器の生演奏、ガムランの音楽と影絵芝居による「アジアのおはなし『インドネシアの影絵芝居』」公演や、「おはなしコンサート」として絵本の読み聞かせと二胡の演奏、「雅楽のしらべと読み聞かせ」といった、お話と民族楽器の生演奏、音楽と絵本をベースに人形劇を楽しむマレーク・ペロニカの絵本『キップロップとティップトップ』をハンガリーの人形劇団が上演、バラボリッシュ、パランスボールを使って歌とリズムで踊ったり、英語で読み聞かせしたり、市内高校生の合唱及び絵本の読み聞かせ、国立国会図書館が提供している「歴史的音源(れきおん)」を活用した鑑賞とブックトーク、楽器づくりワークショップ、作曲家やシンガーソングライター等、専門家を招いた絵本コンサート、図書館スタッフによる作詞・作曲の絵本(紙芝居)によるおはなし会、近隣大学とコラボしたイベント等、特別なイベントとして幅広く実施されていることがわかる。それに対し、アメリカの図書館では、日常的に音楽が取り込まれており、お話の時間に、音楽やクラフトを使ってお話の内容を説明したり、ダンスを取り入れたストーリータイム、弦楽アンサンブルを取り入れたストーリータイムなどが実施されていた。

(8) 親子イベントの実施者について (複数回答)

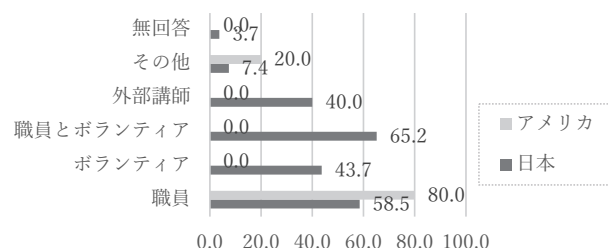


Fig.8 親子イベントの実施者

日本の図書館では、こうした親子イベントの実施について、図書館職員とボランティアによる実施が65.2%に対し、アメリカの図書館では、ほとんどが図書館職員によって実施されていることがわかる (Fig. 8)。

(9) 本年度(2020年度)の親子イベントの実施予定について



Fig.9 本年度の親子イベントの実施予定

日本の図書館では、半数以上が感染対策を実施しながら、親子イベントの実施を予定しており、アメリカの図書館では回答館すべてが実施予定であると回答している (Fig. 9)。これは、(2)の回答からもわかるように、アメリカの図書館では、すでにオンラインによって実施されており、対面実施ができなくても、「地域の情報ハブとしての図書館」の役割を果たすべく、市民のニーズに当てているといえよう。

4. 考察

以上の結果から、図書館における親子イベントにおいて、日本の図書館では、対象とする親子は0歳児から5歳児の乳幼児と保護者が中心であり、月平均5回以上実施され、その平均参加組数は、15組以下であった。さらに、おはなし会はほとんどの図書館で行われており、その内容は、絵本の読み聞かせと、手遊び・歌遊びが中心であり、絵本と音楽を関連付けたイベントは、特別なイベントとして実施されることが多いことが明らかとなった。そして、これらのイベントを実施するのは、図書館員とボランティアスタッフであり、今後の課題として、図書館員が実施可能な絵本と音楽を関連付けた音楽づくりプログラムの開発が必要であろう。

アメリカの図書館では、日常的に絵本と関連付けた音楽遊びが取り入れられており、IFLA 乳幼児への図書館サービスガイドラインに見られた「図書館として適度な範囲での音楽、体を使って遊べる空間」が確保され、実施されていたといえる。筆者らは本調査実施前に、アメリカで予備調査を行っている。アメリカがロックダウンされる前の2020年1月、共同研究者の近藤がBronx Library Center, New York Public Library, Boston Public Library等5館における0歳から12歳を対象としたStory Timeを参観した (Fig.10)。この参観を通して、アメリカの公共図書館におけるStory Timeでは、①歌や手遊びの他、ダンスや身体を動かす遊びと併用していること、②プログラムの種類や質は地域差があること、③Story Timeは図書館員のため、図書館員の力量によ

Fig.10 Bronx Library Center, New York Library of the 無料プログラム

て音楽の質は異なること、④音楽づくりと絵本の活動は、保育園や幼稚園、サマーキャンプなどではみられるが、図書館ではそこに至っていないこと、等を明らかにしている。本調査においても、歌や手遊びだけでなく、ダンスや身体を動かす遊びを取り入れていることが明らかとなっているが、絵本と音楽を関連付けた音楽づくりには至っていないことから、アメリカにおいても、図書館員が実施可能な絵本と音楽を関連づけた音楽づくりプログラムの開発が必要である。

2018年度に行った親子活動における音楽遊びの開発では、親子活動において楽器づくりを通じた音楽遊びが有効であることが明らかとなった。すなわち、身の回りにある材料を用いて、子どもとともに簡単につくることができ、音を出して遊ぶことができる手作り楽器を通して、その場における親子のコミュニケーションを図ることはもちろんのこと、楽器づくりを工夫したり、家庭で発展させたりすることによって、子ども自身の創造性だけでなく、親子による新しい遊びを生み出す契機となることが明らかとなっている(駒, 2019)。

こうした音楽をつくる活動は、文化施設における社会教育の場にも広がっている。一例を挙げると、財団法人越谷コミュニティセンター(現在は、公益財団法人越谷市施設管理公社に含まれる)では、音楽づくりによるワークショップ(1997年)が行われていたが、一般財団法人地域創造の調査研究報告書のなかで、本センターは、これからの文化施設は「学校と社会の中間に位置する」ことが重要であり、会館が学校教育、社会教育の両面に接点をもつプログラムを持つことが地域を芸術文化の面で支える役割であり、そのための活動が「教育プログラム」であると述べている。図書館も文化施設であり、子育て支援のための「絵本と音楽による社会教育プログラム」を開発することによる社会的意義は大きいと考える。また国際的にも、こうした社会教育プログラムの必要性を見出すことができる。前述した国際図書館連盟(IFLA)児童・ヤングアダルト図書館分科会編の「Guideline for Library Service to Babies and Toddlers」に見られるように、「図書館として適度な範囲での音楽」や、「親と保育者のために研修の機会の提供」、「『作って遊ぶ』」などのワークショップ等の開催」といった内容が明示され

ており、今後、図書館における社会教育プログラムの必要性は高いといえよう

5. おわりに

本研究に先駆けて、2020年2月には、幼稚園における子育て支援講座の一環で、絵本と音楽を関連付けたワークショップを実践し、家庭における親子遊びの実態調査として、質問紙調査を行っている^注。その結果、親子が協同して遊ぶことができるような「楽器づくり」や、「作った楽器を用いた音遊び」、「自然素材をもとにした音遊び」等の開発が必要であることが明らかとなった。さらに本研究から明らかとなった、図書館員が実施可能なプログラムの開発と合わせ、今後は、絵本のなかに描かれている音や音楽に着目して、音楽の専門家でなくても図書館員ができる、楽器づくりや、作った楽器を用いた音遊び、自然素材をもとにした音遊びの開発をしていきたい。

注

幼稚園における実践と質問紙調査については、PECERA2020にて発表申請していたが、感染症拡大に伴い、延期となったため、現在のところ未発表である。

付記

本研究は、公益財団法人前川財団による2019年度家庭・地域教育助成を受けて実施した。

文献

一般社団法人「地域創造」(2001) 調査研究報告書(平成12年度)アウトリーチ活動のすすめ—地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究, <https://www.jafra.or.jp/library/report/12/index.html> (2021.01.06閲覧)

岡村典子・難波正明・山崎菜央・深澤素子・松田幸恵・藤井香菜子・高橋香佳・大瀧周子(2017) 幼小をつなぐ音楽活動の可能性(4)—絵本を用いた「表現遊び」から「音楽づくり」へ—, 京都女子大学発達教育学部紀要, 第13号, pp.73-83.

亀和田俊明(2018) 図書館を核としたまちづくり(前編) / 地域活性機構リレーコラム <https://www.glocaltimes.jp/column/2841> (2020.10.20閲覧)

河合隼雄・松井直・柳田邦男(2001) 『絵本の力』, 岩波書店.

菅道子・上野智子・貴志明日香(2017) 幼小「接続期」のカリキュラムを視野に入れた絵本を用いた音楽活動—絵本『ねこのピート だいすきなしろいくつ』を例として—, 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 第67集, pp.173-184.

国際図書館連盟(IFLA) 児童・ヤングアダルト図書館分科会編, 日本図書館協会児童青少年委員会訳(2009) IFLA 乳幼児への図書館サービスガイドライン(= Guideline for Library Service to Babies and Toddlers) <https://www.ifla.org/files/assets/hq/>

- publications/professional-report/100-jp.pdf (2020.10.22 閲覧)
- 駒久美子 (2019) 親子活動のための音楽あそびプログラムの構築, 公益財団法人前川財団2018年度研究及び実践成果報告書.
- 竹内唯・奥忍 (2007) 絵本の中の音楽—画・言葉・テーマとの関連に着眼して—, 岡山大学教育実践総合センター紀要, 第7巻, pp.27-37.
- 図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会 (2005) 地域の情報ハブとしての図書館, https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05091401.htm (2020.10.22閲覧)
- 古市久子 (2010) 絵本から聞こえる音楽, 東邦学誌, 第39巻第1号, 愛知東邦大学, pp.53-70.
- 葉袋秀樹 (2015) 生涯教育研究における連携・協力: 社会教育と公共図書館の関係を中心に, 日本生涯教育学会年報, 36, pp.121-129.
- 文部科学省 (2005) 第Ⅱ部各国調査報告 第5章アメリカの公共図書館, 諸外国の公共図書館に関する調査報告書, http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/06082211.htm (2020.10.20閲覧)
- 文部科学省 (2012) 図書館の設置及び運営上の望ましい基準 (平成24年12月19日文部科学省告示第172号) https://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1282451.htm (2020.10.20閲覧)